『羊飼いの思い』ヨハネ10:11-18

10:11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。
10:12 羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。
10:13 彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。
10:14 わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。
10:15 それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。
10:16 わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。
10:17 父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。
10:18 だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである」

●序論
先週お読みしたところでイエスさまは「よくよくあなたがたに言っておく。わたしは羊の門である」(:7)と言われ、この門から入る者が、その羊の羊飼いであると言われました。
その門とは、「イエス・キリストご自身」「イエス・キリストの福音そのもの」です。
キリストの十字架の贖いによる罪の赦し、そして復活を通していただくいのちの希望です。この門は、「救いはただ神の恵みだ」と語ります。
ただイエス・キリストの恵みを信じて受け取る救いです。
エペソ2:8-9
　あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。
ここで、イエスさまの福音への招きが聞こえていますか？と問われます。
　この世の標準では、信じられないかもしれない。…そういう意味で狭い門。でもただイエスさまを信じればいいのですよ！･･･と！　そこではだれも退けられない。そこではだれもダメだと言われない。それが福音の招きなのです。
だからもう一度確認です。
　エペソ2:8　あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。
そうして、この本当の門からはいることを覚えたならば、祝福があるのです。
:9 ･･･わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。

●本論

Ⅰ．そこに強い願いがある
詩篇23篇のダビデの歌は有名です。
23:1 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。
23:2 主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。
23:3 主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
23:4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。
23:5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。
23:6 わたしの生きているかぎりは／必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。
これは全て、ダビデの経験した神さまの親しい守りをうたい上げたものです。
その冒頭にあるのが、「主はわたしの牧者･･･」と表現する経験だったのです。
かつて羊を飼う経験をしていたダビデが、自分を羊の目線おいたとき、思ったのではないでしょうか。ああ、わたしにはまことの羊飼いがいる･･･と。

今日、イエスさまはこう語ります。
:11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。
そしてその直前にはこうも語りました。
:10･･･わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。
実際に、イエスさまは羊であるわたしたちを愛して、わたしたちを罪の呪いの泥沼から救うために、御自身を犠牲にして十字架で命を捨てて身代わりとなってくださいました。
ダビデが経験し、わたしたちが受け取る救いの背景に、イエスさまの命の犠牲があった。だから「よい羊飼いは羊のために命を捨てる」とあるのです。
それほどまでにして羊を守る。救う。それがイエスさまの宣言でした。

対照的に挙げられているのは、雇人です。彼らは羊を見捨てて逃げ去ると。羊が自分のものでないからだ…とあります。結果、狼がその羊を奪いまた追い散らすとあります。　雇人の思いについても触れています。
:13 彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。
実は、これがこの世でのあたりまえではないでしょうか。
しかしイエスさまは違うことを示す。それがここで語られるメッセージです。

羊飼いであるイエスさまは、御自分の命を捨てて、わたしたちに命を得よと迫られる、それがまことの羊飼い、しかもよい羊飼いイエスさまの強い願いなのです。

Ⅱ．その思いは囲いの外にも及ぶ
10:16 わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導

かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

ここでも、それまでの常識と違う、実に大変なことが言われています。

「囲いにいない他の羊がある」と、イエスさまはそこにまで目を向けてその羊たちをも導かなければならないと言われるのです。

第一義的、つまりその言われる最初の意味は、選ばれた民と呼ばれるユダヤ人たちに対して、異邦人たちに目を向けよと言われているのです。

イエスさまはその外にいる敵意さえいだく異邦人にも目を向けていてくださっている。

実はそれがあの十字架の奥義なのです。パウロは言いました。

ローマ1:16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

エペソ2:14-16

キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、･･･十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。

今日も、「敵意」という現実が身近に、そして世界にあります。

そんな現実の中で、聖書は武力ではなく、政治力でもない。まったく違うアプローチをここで宣言するのです。

「キリストこそ、わたしたちの平和」であると。

神の御子イエス・キリストはすべての人の憎しみと敵意を、すべてを受けとって死んでくださったのです。

すべての人が、その罪と、そのいだく敵意のゆえに、例外なくこのイエスさまを十字架につけてしまった張本人です。

イエスさまは、それを責めてはいません。それを自ら受け取り死んでくださいました。

囲いの中にいる人も、そしてその外にいる人の敵意もすべて身に受けて言われているのです。「わたしは羊のために命を捨てる」と。

すなわち、イエスさまの目はすべての人に注がれています。

10:16 わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

先ほどのエペソ人への手紙の続きにはこう記されています。

エペソ2:18-19　というのは、彼(キリスト)によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。

神の家族になることができる･･･このキリストの十字架の福音は見せてくださいます。

Ⅲ．そこに父なる神の思いがある

10:17 父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。

これだけ読むと、ああイエスさまも大変だなあ。父なる神の愛を獲得するために、自分の命をも捨てなければならないとは…、と思うかもしれません。
　しかしそうではないのです。愛されるためではなく、すでに愛されている。愛の関係の中にいるからこそ…なのです。
父なる神さまと子なるイエス・キリスト。その関係はつねに完全な愛で結ばれています。その愛の関係の中で、父なる神さまとイエスさまはともにその思いと歩みを積み重ねていたのです。そうしてキリストをくださった父なる神の思いがわかります。

　　ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

聖書の中の聖書と言われるの言葉。でもわたしは以前納得できていませんでした。

　　なぜ父なる神は、大切なひとり子を見捨てるようなことができたのか？イエスさまはなぜ、それに従うようなことをしたのか。

しかし事実は違います。イエスさまはだれからもそれを強要されてはいません。
　「誰かが、わたしからそれを取り去るのではない」とある通りです。そして「わたしは自分からそれを捨てるのである」と。

　　10:18 だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである」

　ここに、父なる神とイエスさまとの愛の関係の中に積み重ねられた一致があります。

●さいごに
この福音書の著者ヨハネは、後に手紙を書いてわたしたちを招いています。
　1ヨハネ1:3-4

　　すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。

まことの良い羊飼いであるイエスさまは、ここで「あなたには愛がない、だからダメだね」「これが足りない」「あれができていない･･･だからダメだ」と言われないのです。むしろそのままでいい、ここにあなたを包むために、癒すために、わたしが用意した恵みがある。だから大丈夫。…そう言って、父なる神さまとイエスさまの麗しい交わりに招かれているのです。
　「ここに愛がある」という交わりの中にわたしたちは招かれています。
だからはっきり申し上げます。この恵みの世界は真実です。
この恵み世界を、さらにもっと深く経験してください、と。